
CLANNAD Short Storyies -想ひ行き交う坂道で-

朝倉 由那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLANNAD Short Stories - 想ひ行き交う坂道で -

【Nコード】

N0745D

【作者名】

朝倉 由那

【あらすじ】

物語の舞台は光坂高等学校。Key作品として有名な「CLANNAD」のキャラクター達の短編集！突発で書くため更新日未定、キャラ順番未定！……そんなインチキ臭いショートストーリーです。真面目な話、「CLANNAD」のネタバレを多く含み、また、本編に近い文体を目指して執筆するので、未プレイ者への説明などは一切入れません。と言う事で、「CLANNAD」をやったことがある人、ネタバレを気にしない、説明なくてもイける、とい

う方以外の閲覧はあまりオススメできません。それでもと言う方に
少しでも楽しんでいただければ嬉しいです！

ことみ編「想い出の場所」 - 上（前書き）

ことみの短編です。『鍵作品』としての文体を目指しつつも、
（ただし、まだまだ鍵っぱさは出し切れていない感じです）
『朝倉 由那』としての作風を崩さないようにしているため、
いつものように半角7000〜9000程度に収まるよう上下に分
けました。

それでは、ことみ編「想い出の場所」。お楽しみください。

ことみ編「想い出の場所」 - 上

「こんにちは、はじめまして」

シンとした演劇部室。そこに、たどたどしいながらも一生懸命な声が響く。

「光坂高校の一ノ瀬ことみです」

俺は、椅子に逆向きに股を開いて座り、前のめりになりながら背もたれに体重をかけてジツと見ていた。

「趣味は読書です」

ここまでは順調だ。と、声に出さずに呟く。何度もやってきた挨拶だから馴れてきているんだろう。

「もしよろしければ、お友達になってくれると嬉しいです」

「違う違う！」

馴れがきているが故に、いつものバージョンに戻ってしまっていた！

「そこは『つたない演奏ですが、聞いていただけると嬉しいです』だろ」手を振って制止しながら言った。

夏休み半ば。授業が無いにも関わらず、俺とことみは学校に来ていた。しかも二人つきりで。

「もう少しだな。本番はもっと緊張するだろうからもっとスラスラ言えるようにしないと」俺の前で気をつけをすることみに言う。

「うん。頑張るの」健気に頷くことみ。その姿もかなりかわいいと感じてしまうが口には出さないでおく。リアクションが手に取るように分かる。

『……………』何を言われたのか分からないのか、いつも通りに動作不良を起こす。

テレビか何かならバンバン叩くところだが、相手はことみだ。ジツと待つことにする。

『……………あっ』

回線が繋がり、顔が一気に赤くなる。照れながら俯いてしまう。

……………なんてことになってしまうに違いない。そうなれば練習に支障をきたすのは目に見えていた。

「よし、ことみ。もう一回だ」

「うん。……………こんにちは、はじめまして……………」

ことみが、始めからセリフを繰り返す。俺は椅子の上でそれを眺めるのに戻った。

今、ことみが何故、挨拶の練習なんかをしているのかと言うと、全て杏の企みのせいだった。

〈数日前〉

「今度、ことみのヴァイオリンの発表会するから」

ある放課後、なんの前置きも無く、その女は言った。

「……………頼む。もう一回言ってくれ」

「今度、ことみのヴァイオリンの発表会するから」

俺の頼みを素直に実行する杏。

「……………マジか？」色々な意味を込めて聞いた。春にことみの発表会をやったのはまだ記憶に新しい。あの音を忘れるのは無理だった。「大マジよ。せっかくヴァイオリンをプレゼントしたのに、まだあたし達の前でしか弾いたことないじゃない」手を腰に当てながら杏が言った。

「ことみちゃんはそれでいいんですか？」姉の独壇場を見兼ねたの

か、藤林がぼうつ、と呆けたようにしていることに尋ねる。

「嫌なら無理にやらなくてもいいんだぞ」俺はそう言った後に気付いた。

「私は別にいいの」

果てしなく愚問だったということ。ことみが、そんなことを『嫌だ』なんて感じるはずがなかった。

「ことみちゃん、頑張って下さいね」古河が胸の前で手を握りながら励ます。

「何言ってるのよ部長。部長もやるのよ」笑顔の古河に向かって杏が告げる。

「……………古河も、とは？」言葉の意味するところが分からない。

「せっかく発足した演劇部よ。何かやらないと勿体ないじゃない」

「つまり、演劇部としての演劇もオマケでついてくると？」

俺の非難めいた視線を無視しながら杏が古河の肩を叩く。

「頑張ってるね、演劇部長！」

「わっ、私、また悪の演劇部長をやらないといけないんですか!？」

いい加減、その役も板についてきた古河だったが、あの新喜劇風漫談は演劇部としてやる……………いや、やっていい演目ではなかった。

「部長がやりたい演目で良いわよ。でもそこまで長くしないでね」

「は、はい……………やれるだけやってみます」

杏の言葉に古河は力無く頷いた。

「……………ところで」誰も尋ねる気配が無く、また杏も説明するようなそぶりを見せないため俺が聞くことにした。

「その会場ってのはどこなんだ？」

「時間戻って現在」

「呼ぶ時はことみちゃん」

「だ〜！ 何回間違えてるんだ！」

本日何回目か分からない駄目出し。表情からは分からないが、本番を想定してやると緊張するらしい。

「ジジイ相手なんだから特に気にしないで普通にやればいいんだよ」
ことみのヴァイオリン発表会アンド悪の演劇部長ご披露会の会場は近所の老人ホームだった。どうやったのかは知らないが、真つ当な方法でこぎつけたらしい。

「でも、やっぱり緊張するの」ことみは肩を落としながら言う。こんな様子を見ると、本当に全国模試トップテン常連なのか疑いたくなる。

「大丈夫だ。多少噛んでも、爺さん婆さんが相手なら何も言われな
いから」

「……………」ことみは小さく頷いた。

その時、演劇部室のドアが開く。

「朋也〜、ことみ〜、順調？」

悪の元凶が現れた。と言っても、貧乏姉妹から口ボを奪おうとする悪の演劇部長ではない。

「まあまあだな。そっちはどうなんだ？」適当な椅子に腰を下ろした杏に尋ねる。

「そうね〜、部長と椋が二人芝居風にやるみたいだから準備はそんなに大変じゃないみたい。今は演技練習よ」長い髪を揺らしながら言う。

古河と藤林は杏と一緒に練習していた。本来、（名ばかりの）演劇部員である俺もそっちに行くべきなんだろうが、特にする事も無いようなので、ことみの側に就いていた。

「ボケオナリーのゆるゆる系漫談じゃないだろうな？」

「老人ホームの人相手にそんなことしないわよ。普通の昔話みたいよ」

古河達も色々と考えているようだ。演劇に関しては素人と言って

いたが、古河と藤林なら、最悪でも普通の演劇に仕上がるだろう。
「んで？　ことみの方はどうなの？」杏はことみを見ながら聞く。
「……………」ことみは杏の前までトコトコと歩いて行き、軽く頭を下げた。

「こんにちは、はじめまして。光坂高校の一ノ瀬ことみです」ことみはたどたどしく挨拶を始める。

「趣味は読書です。つたない演奏ですが聞いて頂けると嬉しいです。一曲目は私の大好きな曲です。一生懸命引くので聞いてください」
簡単に子供っぽい、だがことみらしい挨拶をした。春に作った自己紹介のアレンジだが、ことみらしくてよかった。

「ちゃんと言ってるじゃない。これなら大丈夫ね」杏がことみの頭を撫でながら笑う。

「まあな。ずっと練習してたからな」

「もう間違えないの」

俺が笑いかけると、ことみは恥ずかしそうに頷いた。

「それでさ、この後部長と椋がここで練習するって言ってたから」
「は？」

杏に聞き返す。そんな話は寝耳に水だった。

「古河ん家で練習してたんじゃないのか？」

「BGMとか小道具とかはここにあるらしいからこっちに来てやるんだってさ」俺の問いに軽く答える杏。

「じゃあ、ここじゃヴァイオリンの練習出来ねえじゃねえか」

「そうねえ……………」どっか別の場所ですべてきてよ」

無責任なことを言っただけの杏。俺は反論する気も起きずに、ただ力無くことみを振り返った。

「朋也君、図書室でやろう」

名誉図書委員の証、『ことみ』と書かれたプレートのついた鍵を取り出しながら答える。

「図書室か……………」夏休みだから誰もいないだろうしな。良いんじゃないか？」

平日ならば放課後という時間帯の今だが、夏休みなら使ってる奴は誰もいない。休みの日と同じ要領だ。

「終わったら呼びに行くからさ。頑張ってやってきなさい」杏がことみの頭をポンポン叩きながら言う。

「頑張るの」ケースに収まったヴァイオリンを取りながらことみは頷く。

「じゃ、古河と藤林によろしく言っといてくれ」俺はことみの脇に立ちながら手を振った。

ギョッ！

「あんたはまだ」

手に軽い抵抗を感じる。見ると杏が俺の袖を引いていた。

「あん？ 何か用か？」振り返る。そこには何かを企む杏の顔。まづい。良くない兆候だ。

「ちよつとね。ことみは先に行つてて」ことみに軽く目配せする。

ことみは一瞬首を傾げたが、軽く頷くと図書室に向かった。

「何の用だよ？」僅かに警戒する。この顔の杏は、俺にとってあまりよろしくない事しか言わない。

「あんた、最近ことみと二人きりになってないでしょ？」杏が俺の耳に口を近付けて言う。

「は？ さつき二人きりだったじゃねえか」杏に言い返す。

ことみと二人きり。それはまさに先程までの状況だ。それに、最近のことみと一緒に練習を繰り返している。そう考えると、杏や古河と一緒にいる時間よりも長いはずだ。

「そうじゃないわよ、バカ」杏が呆れ顔で言った。

「ことみと二人で遊びに行ったりしてないでしょ、って言ってるのよ！」

ああ、そういう事か。確かにそういう時間はなかなか無かった。

期末試験に（俺だけが）苦しめられ、更に杏のこの企画だ。

（まあ、期末はことみに言われて一緒にやったからいいけどな）

普段は試験なんか気にも留めない。だが、ことみの『朋也君も勉強しないといけないの』という、意外にも強い押しを受け、勉強するはめになってしまった。

まあ、ことみのマンツーマンの指導のお陰でそこそこの良い成績を取れた。と言っても、毎回到比べれば、だが。

とりあえず、そんなこんなでことみと二人で遊びに行ったりする時間は全然作れなかった。

「確かにそうだが……半分はお前のこの企画のせいじゃねえか」
杏を見ながら溜め息混じりに言う。

「だから、さすがに悪いかなーって思ったのよ！ 明日は練習休みでいいわよ！」

逆ギレ気味に言われる。理不尽さを些か以上に感じるが言い返さないことにする。

「何でわざわざ俺だけに言う？ ことみにも言えば良いじゃねえか」
とりあえず疑問をぶつける。

「あんたがあたしに頼み込んで休みを取った、って言えば、ことみは『朋也君、私のことそんなに考えてくれてるんだ』って顔赤くして喜ぶわよ」

ことみのマネ（と思われる言葉遣い）をしながら杏は言う。

「もうフラグ確定でことみルート一直線ね」

ついでに訳の分からないことも言ってくれる。

「はあ………分かったよ。ことみをデートに誘えばいいんだろ？」
頭を掻きながら言う。

「そうよ。あたしと椋と部長は普通に練習するけど気にしないでいいからね」

「いや、そんなこと言われたら気にしちゃつまんだが」

杏の言葉にツッコミを入れておく。

「ったく。まあいいわ、早くことみのトコに行きなさい。待ってるわよ」杏は俺の背中を押して笑いながら言った。

「……………サンキュな」

「あたしに礼なんか言っでないで早く行きなさいっ！」

杏の言葉に頷きながら演劇部室を出て、まっすぐ図書室に向かった。

図書室のドアは少しだけ空いていた。そして、俺はいつかのように取っ手に手をかけ、中に入って行った。

ことみ編「想い出の場所」 - 下

（図書室）

図書室はことみと再会した時と同じように暖かな日だまりとなっていた。そして……

「……………」

あの日と同じように、ことみは床にクッションを敷き、裸足になって本を読んでいた。ただ、本は手に持つ一冊のみで、傍らにハサミはもう無かった。

「待たせ過ぎたか……………」俺をただ待つてるのも退屈だったんだろう。

「こうなったら呼ぶしかないが……………」いつか、色々と邪魔をしてみたが効果はゼロだったことを思い出す。

「ことみちゃん以外で反応するか試してみよう」ただ呼ぶのも面白くない。少し遊んでみよう。

「ことみ、ことみ、ことみ……………」

まず手始めに、前と同じように連呼してみる。

「……………」

……………効果は相変わらずのようだ。

「こつとつみつ」「テンション高めに呼んでみる。

「……………」変化無し。

「こおとおみい……………」恨めしげに呼んでみる。

「……………」全く反応しない。

「ぐどみい……………」濁らせて呼んでみる。

「……………」へんじがない。ただのしかばねのようだ。

「ことみ君……………」

「ことみ！ 助けてくれ！」

「ことみつ！ 火事だ！」

「ジエツト斎藤、参上！」

「ことみ、それと便座カバー」

君付けで呼ぼうと、助けを求めようと、火事だと知らせても、春原の後輩の振りをしようと、語尾に『それと便座カバー』をつけようと、眉一つ動かさない。

「……………」

さすがに、春原が横で暴れてても全く気付かないだけある。奥の手以外では反応しないようだ。

しかし、俺がアホな遊びに従事している間にことみは本を半分ほど読み進めている。

「……………そろそろ起こすか」深く息を吸い込む。

「……………ことみちゃん」

「あっ……………朋也君」

奥の手の効果は絶大だった。

「杏ちゃんのお話しは済んだの？」ことみは軽く首を傾げながら尋ねてくる。

「ああ。まあ大したこと無い話だったよ」明日のことは練習の後に言うことにした。杏の言うように赤くなったりして、回線が今シヨートするのは厄介だ。

「じゃ、練習するの」ことみは立ち上がろうとする。

「いや……………」俺は考えるよりも先に手でことみを制していた。

「……………」久々のハテナマーク三本。

「ことみ、まだ本読み終わってないだろ？」ことみが開いている本を指差す。半分以上は読んでいるがまだ結構な量が残っている。

「うん」

「読んでて良いよ。とりあえず、最後までは」

「……………??？」

俺の言いたいことが分からないらしい。首を傾げ、再び頭上にハテナマーク三つを出している。

「だから……………最近はこの感じの時間が無かったから、今はのんびり本読んでて良いよって言ってるの」「一言一言、ゆっくりと告げる。俺の言葉を噛み締めるように幾度となく頷くことみ。」

「うん……………朋也君、ありがとう」

ほわっ、と微笑みを浮かべると、再びクッションに腰を落ち着ける。

それから、絶対防御状態になるまでは一瞬だった。目が左右を行ったり来たりし、身じろぎ一つしなくなる。

「ことみ……………」名前を呼んでみる。しかし、もう返事は無い。

「早いな……………ことみ？」疑問形にしてみる。やはり返事は無い。

「……………」さすがにネタ切れだった。

「……………寝るか」読み終わるまで寝ることにする。読み終わったら起こしてくれるだろう。

机に突っ伏す。暖かい日だまりの中、ことみがページを送る音だけが響いていた。

一学期にはこうしてことみの側で、心から安心して眠ることは何度かあった。ことみが杏や藤林、古河と友達になっからはめっばう減ったが、やはりここは俺とことみのルーツなんだ。

そんなことを考えながら、俺は眠りに落ちていった……………

気が付くと演劇部室にいた。そこでは古河が水筒を一生懸命に振っていた。

「……………何、やってるんだ？」古河に尋ねる。

「一度冷やしたパンの煮汁はよく振ると香りが変わるんですよ」

「またか！？　またパンの煮汁なのか！？」

思わず古河の言葉に戦慄する。

「朋也君、ここ曲がる」俺の背後から、図書室で本を読んでいるはずのことみの声がした。

慌てて振り返ると、いつもの腕の屈伸をしている。

「逆にも曲がる」そう言っただけの間接の向きを無視してありえない方向へ腕を曲げた。

「んなつ！？　お前、腕っ！？」

「曲がる訳おまへんがな」

驚いた俺を見ながら腕を元に戻す。

「いやいやいや、今曲がつてたぞ！」

「腕が逆に曲がらない私は岡崎君の妹にはなれません」

ことにツツコミを入れていると、背後から意味の分からん藤林の声。

「でもパンの煮汁が大好きなお姉ちゃんはお母さんになれます」

「いや、腕が逆に曲がる妹はいらんし、パンの煮汁が好きな母親もいらん」

あのマジメな委員長が支離滅裂なことを言っている。いろいろな意味で恐怖を感じる状況だ。

「今の朋也は溢れ返るパンの煮汁の香りによって、心理状態が興奮状態に強制的に変換されてるのよ」

杏が神妙な面持ちで言う。

「お前、またパンの香りにあてられたか？　口調が変わってるぞ。文法も変だしよ」

「きつとあたしの肘が逆に曲がらないからね。今、あたしは非常に追い詰められてるのよ」

杏までもが訳の分からないことを言いやがる。

「これは……………夢なのか？」自分に尋ねるように呟く。

「そうさ。これは夢だ」

突然、俺の呟きに返答が。ゆっくりと振り返ると、春原が杏に肩車にされていた。

「春原……………」

「これは夢だ。その証拠に、今の僕は一ノ瀬ことみよりも頭がいい」
春原は杏の頭上でいつか聞いたようなセリフを言う。どこで聞いたのか思い出そうとして、自分が春原に言った言葉だと気付く。

「岡崎、お前はオーストラリアの首都はメルボルンと思っているが実は違うのさ。その名はキャンベラだ」春原は自信満々で俺に言った。

「マジか……………」

「キャンドルを立てたベランダと覚えたらいい」

春原は髪を掻き上げながら頷く。

「……………これはあの時の復讐なのか？　なあ、春原？」弱々しく尋ねる。色々と気力が失せる状況だ。

「違うう！　パンの煮汁に倒れただんご大家族のドボンジョだ！」

……………リベンジと言いたいんだろう。

「これが夢なら……………現実の俺は何をしてるんだ？」

「校長室で杏にパンの煮汁の風呂に入れられるところなんだ」

本当ならば非常に恐ろしいことを春原は言った。

「マジか……………」？　どうすれば目が覚めるんだ？」

「今すぐ僕と岡崎でだんご大家族を歌うんだ」

絶望した俺に、春原が爽やかに笑いかける。

「……………お前、キャラが変わってないか？　口調も変だ」

「これはパンの香気のせいだ。それよりも岡崎。今すぐ歌うぞ」

素朴な疑問を軽く流し、春原は演劇の小道具のメガホンを手に取る。そして息を吸い……………

次に聞こえて来たのは春原のだんご大家族の歌ではなかった。空間に響く音は、懐かしい感じがするあの音色……

「……………ヴァイオリン？」

優しいヴァイオリンの高音だった。周りの景色はいつの間にか演劇部室から真つ白な空間に変わっていた。杏、藤林、古河、春原、それにことみの姿は消えている。

支離滅裂な悪夢はいつの間にか終わり、俺は一人で鳴り響くヴァイオリンの音に包まれていた。

「ことみのヴァイオリンか……………？」小さく呟く。それは、あの日、初めてことみの家の庭で聞いた、あの曲だった。

……………きつと、目が覚めればそこは一ノ瀬家の庭。あの、真つ白なテーブルと椅子で寝てるんだ。側では、ことみがヴァイオリンを弾いて、俺の寝顔を眺めるんだろう。

「起きなくちゃな……………」そう自分に向かって呟く。ことみは今、俺が起きるのを待ってるんだろう。

小さい頃に別れてから高校までの間、俺はことみを待たせてしまった。これ以上、ことみを待たせるような真似をしてはいけない。

俺は静かに目を開く……………

「ん……………」

俺の目に飛び込んで来たのは、自分で作り直したあの庭ではなく、図書室の本棚だった。

「……………ことみ」

ことみは、いつも本を読んでいる場所でヴァイオリンを弾いていた。目を閉じ、一つ一つの音を確かめるようにして……………あの日の曲を引いていた。

途端に演奏が終わる。俺の声に気付いたんだろう。

「おはよう……朋也君」ほわっ、と微笑むことみ。それだけで安心感が俺を満たす。

「ああ。おはよ、ことみ」だから、自然に返事が出てきた。

「よく眠れた？」

「ああ……ぐっすりな」

首を傾げることみに笑いながら答える。窓の外を見ると、既に空は橙色に染められていた。

「悪いな、寝ちまって」フウツ、と息を吐きながら言う。

「うっん……私、朋也君の寝顔見るの、好きだから」

いつか聞いた言葉がかけられる。ことみの言葉に頬が緩む。

「俺も、ことみの側で寝るの好きだからな」

俺も同じ答えを返す。

俺達は再会した図書室にいた。今まで、二人で幾度となく時間を重ねたここ。一ノ瀬の庭が第一の始まりだったのなら、ここは第二の始まりなんだろう。あの庭が大切な場所なのと同じで、この図書室は俺とことみの大切な想い出の場所なんだ。

「なあ、ことみ……」

「???」

突然口を開いた俺に首を傾げる。

「明日、杏から休みもらったんだ。二人でどっか行くか？」昼間、杏に言われたことを言う。

ことみは軽く首を傾げたが、すぐに首を横に振る。

「……いいのか？ 最近二人で遊んだりしてないけど」ことみに尋ねる。しかし、俺は心ではことみの考えが分かっていた。

「いいの……」ことみは小さく頷く。

「今日、朋也君とここに来れたから……」

ことみと俺の考えはやはり同じだった。二人で出掛けるのも悪くはないが、俺はここでことみと一緒にいるだけで十分だった。

「……そうだな。俺も……そう思ってたんだ」小さく微笑む。

「それに、改めてどっか行くにしても、ここに来ることになりそうだな」

俺とことみの（二人きりでは）初めてのデート場所だ。遠出して遊ぶのも悪くはない。だが、俺達が一番落ち着くのはここなんだ。「うん。私は朋也君がいてくれればいいから」僅かに頬を朱く染めることみ。

俺の存在がことみを安心させるなら、少しでも支えになるのなら……それは贅沢なことだと思う。

ことみと出会う前、他人を拒絶して、家族を拒絶して、一人で暮らしていた俺にとっては。

「ことみ……」

ことみのことがどうしようもなく愛おしくなつて、ことみの存在を感じたくなつて、俺はことみを抱きしめていた。

「あつ……」驚きの声を上げるものの、俺に身体を預けてくれるあの時……ことみを過去の呪縛から解き放つてあげられたあの時と同じように、優しく、それでいて確かに抱きしめる。そして……

「ん……」

目を閉じ、優しく唇を重ねる。唇を通して、ことみの暖かさが伝わってくる。

「……」唇が離れると少し寂しさを感じる。

そんな感情を隠すようにことみの頭を掻き混ぜるように撫でる。ことみは気持ち良さそうな表情で身体をあずけてくれる。

ガラッ

突如、図書室のドアが開く音がした。振り返ると、杏に加えて古河と藤林がいた。

「やつほー……って、あらら？ お邪魔だった？」

杏はことみを抱きしめる俺を見ながらにやにやする。

「いや……いいよ」俺はことみを離すと杏達に向き直った。

「おおお岡崎君！ わわ私達は、ななな何も見てないので、きききき気にしないで下さい！！」

俺やことみよりも、藤林の方が真っ赤になっていた。

「さすがは岡崎さんです」古河が意味の分からないことを言う。

「やっぱり岡崎さんはことみちゃんの彼氏です」

ニコニコ微笑む古河は俺とことみの顔を交互に見て、また更にニコニコする。

「んで？ 明日の話はしたの、朋也？」

真っ赤な藤林とニコニコしている古河を尻目に、杏が俺に聞く。

「ああ。だけどさ、やっぱりいいよ」

「へっ？ いい、って？」

俺の言葉が理解できていないようだった。

「もういいんだ。今まで二人きりでいられたから」ことみの頭に手を乗せながら言う。

「うん。私はここで朋也君と一緒にいるだけでいいの」

「それに……みんなでいるのも楽しいからな」

俺とことみは微笑みあう。それで杏は納得したようだった。

初めは、ここはことみが一人になれる場所だった。

次に、俺とことみの再会場所になった。

そしていつしか、俺やことみが何度も過ぐす場所になり……

最後に、俺達にとって心が休まり、安心できる場所になっていた。

いつかは卒業し、ここに来ることが無くなるかもしれない。それでも、ここはいつまでも、俺達の大切な“想い出の場所”なんだ……

⋮

ことみ編「想い出の場所」 - 下（後書き）

と言う事でことみ編でした。いかがでしたでしょうか？

少しでも「CLANNAD」らしさを感じられたら嬉しいです。

この短編は大分前に書いたのを書きなおしたもので、内容は稚拙と思います。

ギャグシーンとシリアスシーンの切り替えが上手くできてないような……

アニメが始まり、あの感動が再び……そこでこの短編の存在を思い出し、投稿することにしました。

ぶっちゃけると下だけで十分な気がします。どうせなので全部投稿しました。

それでは、次回がいつで、一体誰の短編になるかは作者である私にもわかりませんが、楽しみにしていただけると非常に嬉しいです。

「CLANNAD」と言う大作の短編なので、本編と比べるとまだ幼稚な文章ですが、

感想や評価を頂けたらとても嬉しいです。好評でも酷評でもぶつけて下さい。

それでは、無駄に長い後書きも、この辺で失礼します。次回も楽しみにしていただけたら光栄です。

杏編「忘れ物と贈り物」 - 上

「クリスマス・中庭」

「遅えな……………」北風の冷たい中庭で、一人寂しく石垣に腰をかけた。息を吐くと水蒸気が凝結して白くなる。空は快晴。残念なことにホワイトクリスマスの気配は全くない。まあ、別に雪が降ったところで寒いだけで良い事なんざ一つとして無いんだが。

俺が冬休みだったのにわざわざ学校なんかに来てるのは 完璧に自業自得なのだが 補習と就活を強制させられてるからなのだった。

「だりい……………」マジで怠い。だが、さすがにこれ以上うかうかしてられなかった。棕は看護学校、杏は教育学部志望、更に春原までもが実家の方で就職先を見つけている。このままでは春原以上の甲斐性無しになってしまう。それだけは避けねばなるまい。

「それに、杏もいるんだしな」

そう。これまでと違い、卒業後も杏と付き合っていくつもりなら、俺一人でアイツを守るだけの力を付けねばならない。学校や親の庇護から離れ、俺だけの力でアイツの笑顔が作れるように…………

「俺も変わったな……………」らしくなく感傷的になってるようだった。これもクリスマス魔法なのか。それとも杏や棕と一緒にいることで俺自信の心の闇が埋められていつてるのか…………まあ、そんな事を自問したところで答えなんか返ってくる筈もなく。

ありがたいことに、冬休みだというにも関わらず杏は弁当を作ってくれてる。だが、今日は杏にも用があるらしく、俺と入れ違いに職員室に入って行った。

「ま、いつも待ってもらってる分、たまには俺が待つか」杏は必ず俺が出て来るよりも早くここに来て待っていた。『寒いだろうから、もっと遅くても良いぞ』と言っても『待ってるのも女の子にとって楽しいの』とか言ってる聞かなかったのだから俺がそこまで気にする必要はないのだが。

「朋也ーっ!」

噂をすれば、大声で名前を呼びながら昇降口から出てくる杏が現れた。幸いなことに冬休みだから中庭には誰もいない。部活の連中は文化部棟がグラウンドにいるだろうし。

「何度も言うが、大声で人の名前を呼ぶな」

「別にいいじゃないの。減るもんでもないんだし」

まっこと、細かいことはとことん気にしない女だ。まあ、そんなところもあるからこそ好きになったと言えそうなのだが……

「……………？ どうしたの？ 顔、赤いけど」

「なっ、何でもねえよっ!」

「？ まあいいわ。早くお昼にしましょ」

自分で考えておきながら赤面するとはなんとも情けない。やはりクリスマス魔力が、どうも思考が浮いた方向へ偏ってる気がする。

「ところでだ……………」

「ん？」

突然口を開いた俺に首を傾げる杏。その手に握られてる者に対し、何の疑問も感じていない様子。

「一体全体、その馬鹿デカイ弁当箱は何だ？」杏の手に握られる風呂敷を指さす。

そこにあるのは二人分とはどうも臍眼目に見たところで考えられないほどの巨大な塊、もとい弁当箱があった。いつか使っていた重箱と言う訳ではなくステンレス製のようだ。今日の飯は洋風なのか？ 「何って、普通のお弁当なんだけど」右手を上げる。そこに握られ

る驚異的なサイズの弁当。軽く十五センチ立方くらいはあるだろう。
「馬鹿言っな。二人で食いきれる量じゃねえぞ。これは新手の嫌がらせか？」

「失礼ね。せつかく作ってきたのにそんなこと言ってたら食べさせないわよっ！」

「んなこと言ったって……さすがにこりゃあ俺とお前じゃ残っちゃうのが目に見えてるぞ。お前だってそこまで食わないだろ」

引かずに文句をつける。食わせてもらってる以上、残すのは俺としては非常に後味が悪い。何の魂胆があるのか。

「……もしかして素でそんなこと言ってるの？」

「紛れもなく素なんだが……世間一般ならこの状況でその弁当箱の意味が理解できるのか？」

はあ、と大げさに溜め息をつく杏。やれやれと呆れられると、むつとなるのを禁じえないんだが。

「アンタって本当に鈍いわねえ……今日が何月何日だか言ってみなさいっ！」手を腰に当て、仁王立ちの杏。ただ、片手には巨大な弁当がある訳で、そこまで迫力は出てない。

「何日って……普通に十二月二十五日だろ？」

「……そこまで言って分かんないのなら真正の馬鹿よ。阿呆よ。まぬけよ」

罵詈雑言を撒き散らす杏。なんだ、今日は結構しつこいな。いつもならこの辺で切り上げてるのに。

「今日は二十五日、クリスマスっ！ 聖キリストの誕生日でしょうがっ……！」

クリスマス……まさかこの女までがそんなものを気にしてるとは。しかし、それがどうしたら巨大な弁当につながるんだろうか？
「いや、クリスマスなのは俺だって知ってる。だが、それが巨大な弁当箱に行きつく道理が全く理解できないんだが」

「だから！ クリスマス用に手をかけて作ってたらかなり多くなっ

ちゃったってことじゃないのよ!!」

……世間一般ではこの理不尽な道理がすぐ分かることとして通ってしまうのだろうか？ だとしたら、俺は学校だけでなく世間一般の常識から見てもはみ出し者と言う事になってしまっんだが、それはさすがにショックでかいぞ。

「威張って言う事じゃないと思うんだが」

「はあ、彼女持ちなら相手の気持ちを察しなさいよ。料理好きなら間違いなくこうなるわよ。全く、アンタの彼女になる人も可哀想ね」
今現在、俺の彼女やつてるのアンタですから。

「……まあ、今はおとなしくその理不尽な言動を甘受するとして
もだ、食いきれなくても文句言っなよ」

「まあまあ、中身見たらそんな心配も吹っ飛ぶから大丈夫よ」

えらく自信満々な杏さん。自分の腕には自負を持つてるこいつだが、ここまで自信たっぷりなのはけっこう久しぶりかもしれない。

「んじゃあ、そこはかとなく期待するか」

〈数分後〉

中庭の石垣に腰を落ちつけ、弁当の用意をする。と言っても風呂敷広げて蓋を外すだけなのだが……

「さあ、見て驚きなさいっ!」

とか言っつて、杏がじらしてるのだから一向に飯が始まらん。

「いいから早くしろ。あんまりじらしでも逆効果だ」空腹が行き過ぎると感動する余裕もなくなるってもんだ。

「ホントにムードのかけらもないわね……まあ良いわ。ではでは、お披露目」

パカッ、と音をたてて蓋が外れる。そこに鎮座するは色とりどりの食材。杏が自信を持つのも頷けるほどに豪勢な内容だ。ロースト

チキン、マッシュポテト、ミートソースのスパゲティ……眩いばかりのレパトリーが三段弁当に詰まっていた。

「ん？ 下段はどうしたんだ？」杏は下段を開けずに隠したままにしていた。

「それは食後のお楽しみ。上の二段ならなんとか食べられるでしょう？」

「そういう事が……」

何が入ってるのかは全く読めないが、確かに上の二段なら二人でも食いきれる量だ。

「そいじゃ、早速……」

「ゴメン、朋也。ちょっとトイレ」片手でゴメンの構えを取りながら杏が立ち上がる。

「……いただきます出来なくなっちゃったじゃねえか」

「だからゴメンって言うてるじゃない」

頬を膨らます杏。ふてる杏をもうしばらく見ていたかったが、それでは飯が遅れる一方だ。

「待っててやるから早く行ってこい」

「すぐ戻るから、ゴメンね」

弁当を目の前に待たせることが悪いことだと思ってるのか、珍しくゴメンを繰り返していた。バイクで曳いた時よりも多いのもどうかと思うが。

「しかし……」便所に行くなら、行った後で蓋を開けてもらいたかった。目の前には上手そうな弁当、思わず手を出したくなる。

だが、待つと言った以上待たなきゃいけないし、杏に作ってもらっておいて先に一人で手を付けるのは気が引ける。

「素直に待つか」これが春原とかの弁当なら待つことなんて無いのだが。

「ん？ 岡崎、一人で何してんだ？」

噂をすれば何とやら、春原がパンを片手に歩いて来た。こいつも

俺と同じく補習&就活組なんだが、さつきも言っただように就職は結構なとこまで決まってるようなので、日程は俺よりも大分楽そうであつた。

「杏を待つてるだけだ。何も無いからあっち行け」シッシツと春原に手を振る。

「杏？　もしかして、この弁当作つたのって……」

「ああ、紛れも無く杏だぞ」

疑わしそうな目で弁当箱を覗き込む春原。

「マジかよっ！？　あの藤林杏がこんなに美味しそうな弁当を！？」

「……委員長の間違いじゃないよね？」

「そんなに信じられないのか？」

「いや、信じてない訳じゃないけど……」

珍獣とかだんご大家族とかを見るような目で弁当を凝視している。

「……どれどれ？」

「あつ」

止める間もなくマツシュポテトに手を伸ばす。口に放り込みもぐもぐと咀嚼すること数秒……

「……くどいようだけど、これ、本当に藤林杏が？」

「しつこいぞ。掠が髪を伸ばして杏の振りをしてるんじゃないば間違いない杏だ」

俺よりも先に弁当に手を付けたのもム力つくが、杏の料理をこうも否定されるのは更にム力つく。相手が春原だと尚更だ。

「だって、あの藤林杏だよ？　ガサツで、男勝りで、常に喧嘩腰で

……」

「……おい、春原」

「辞書投げるし、色気も無くて、可憐さの欠片も無くて……」

「おい、春原」

「オマケに凶暴で、胸もぺったんこ。それでこんな弁当作るなんて想像出来ないよ」

言いたいだけ言い切ったらしい。満足げな顔で俺を見る。

「満足そうなところ悪いが、後ろ見た方がいいぞ」

「えっ？」

春原が振り向こうとした瞬間！ 肩に手が置かれた。それはもう岩でも砕きそうな勢いで。

「陽々平々？ ずいぶんと絶好調みたいね？」

「き、杏さん？」

春原が恐怖で硬直する。俺を見ていた両目は既に何も映していなかった。きつと、待ち受ける惨劇が頭中で再生されてるんだろう。

「何かあたしの色々言ってたみたいだけど、よく聞こえなかったからもう一回言ってくれる？」

「ひいつ！？」

春原の背後に立つ杏が、春原の耳元に顔を近付ける。俺から見ても恐いんだから、春原なんか地獄だろう。

「それに勝手にあたしのお弁当に手を出してたわよねえ？ 美味しかったあ？」

「は、はい！ 僕なんかには勿体ないくらいの味でした！！」

ぐぐつ、と杏の手に力が入り、指が春原の肩に食い込む。恐怖に目を見開く春原。

「ありがとうね」。お礼に、目ん玉くり抜いて、それ喉に詰めて窒息させてあげるから」

「ひいつ！！」

杏の腕を振り払い、腕の射程から逃れた。しかし、安心するのはまだ早い。いつの間にか杏の手には国語辞典。攻撃範囲には十分入ってる。

「ひいつ！ 岡崎、助けてくれえ！！」泣きそうな目で俺を見詰める。隙を見せず、杏を警戒しながら。

「あ、おい春原。あそこにおっぱい丸出しで走ってる美佐枝さんがいるぞ」

「えっ！？ どこどこ！？」

「ごげし！」

杏から意識を逸らし隙を見せた瞬間、無防備な鳩尾に国語辞典が叩き込まれた。

「くばあー!!」

「さーて、どうしてくれようかしら？」

一撃必殺の辞書投擲を真っ向から食らい倒れ込んだ春原に杏が歩み寄る。

「数分後」

「終わったか……」目と鼻の位置がおかしくなるほど殴られた春原は目の端に放っておいて、杏に向き直る。

「先に食べてて良かったのに。お腹空いたでしょ？」

「いや、待ってるって言ったし」杏が俺の隣に腰を下ろした。

「そういうトコだけは本当に律義ね」

「褒めてんのかケンカ売ってんのか全然分からんのだが」

「褒めてるつもりよ、一応ね。それじゃ、食べましょうか」

箸を取り、俺にも渡してくる。もはや使い慣れた黒塗りの箸。それを握って手を合わせる。

「んじゃ、いただきますと」

「いただきます」

空気の冷たいクリスマスの昼下がり、杏手製の弁当に舌鼓を打った。

杏編「忘れ物と贈り物」 - 上（後書き）

どうも、今回は杏編です。時事ネタにしたのは良いのですが、時間不足で下を書ききれず、とりあえず上だけでもクリスマスの間に投稿しよう、と中途半端なところでの投稿です。早々に下も書きあげますので、それまでお楽しみに。

自分でクリスマスネタを投稿しといてなんですが、独りクリスマスは寂しいです、ハイ。と言う事で、作者を慰めると思って感想や評価を頂けると嬉しいです。……………と言っても、まだ上ですし、あまりCLANNADっぽくない文体となったなあと反省している今回ですが。では、下の方もお楽しみに！

「凄いな。味にいつもよりキレがある……………のような気がする」

「気がするんじゃないやなくてキレがあるのよ。自分の彼女の料理の腕くらゐ素直に褒めなさいよ」

口にポイポイ料理を放り込んでいく俺と杏。その弁当なのだが、これまた美味い。文句の付けようが無いほど美味い。いつもの文句の付けようがある訳でもないのだが、まあとりあえずいつもに増して美味い訳だ。

「これ朝から作ったのか？ だとしたら相当な早業だ」

「残念だけど昨日の夜から仕込みはしてたわよ。さすがにこれだけの量は朝だけじゃ作れないわね」

どこか嬉しそうに言う杏。実際、料理をしている間は楽しいのだから。

「……………と言うか、いつもは朝っぱらから料理してんのか？」

「冬休み入ってからだね。あと、休みの日とかも。平日は多少は夜から準備してるけど」

だとしたら、多少は申し訳ない気分になる。俺はただ食ってばかりなのにわざわざ夜から準備をしてるんだとしたら割が合わない気がする。

「……………申し訳ないとか考えてたら怒るわよ」

「……………一応訳を聞いておこう」

こちらの考えを見透かしたかのように腕を組んで睨んでくる杏。

「あたしは朋也が美味しそうにお弁当食べてくれればそれでいいの。割に合わないとか、迷惑だとか考えてたら殴るわよっ！」

「気を遣って殴られるってのも珍しい話だ。……………とりあえず悪かった。そんな風に考えてくれるなんてな」

杏は俺の言葉と共に顔を赤くする。そこまで恥ずかしい事を言っただけでもないんだが、どうやらツボにはまったようだ。

「ふう……………ごちそうさん」

「はいはい、お粗末様でした。今日のは我ながら良い出来だったわねえ」

重箱を片付ける杏に手を合わせて礼を言う。確かに今日のはいつもよりも三割増しくらい美味しい気がする。と言うか、実際美味しい。「クリスマスの魔術つても怖いもんだな」人の味覚をも操作するのか、それとも杏の気合を弄ってるのか……………

「ん？ 何か言った？」

「何でもねえよ。それより、この後どうすんだよ？ 俺はまだ補習と就活残ってるんだが」

別に杏は学校に用がある訳でもなし……………さて、このまま帰るんだろうか。

「どうしよっかな？ あたしは別に学校には用も無いし……………」
腕を組んで何やら考えてる。……………が、しかし、その目が不意に見開かれた。

「……………?? どうした、杏？」

「えっ！？ あっ、ううん。……………な、何でもないわよっ！！」

あからさまに何でも無くない顔をする杏。こいつはいつになっても嘘をつくのが果てしなく下手だ。

何か知らんが、胸元を両手でサワサワしてる。何か探してんのか？
「嘘つけ。何だよ、その慌てぶり。何か、用事でも思い出したのか？」

「え、う、うん……………そ、そう。確か用事があったのよ」

どうも妙だ。杏がここまで慌てるのも珍しい。と言うか、こいつがここまで慌てたのを見たのは初めてかもしれない。

弁当忘れようが、教科書忘れようが、体操服忘れようが、たいて

いは誰かに借りたりして慌てる事なんか微塵も無い。そして、その被害者の大半は春原、まれに俺だ。はた迷惑な話だが、とりあえず、学校生活じゃ何かあっても絶対に慌てることはない。

「……………???」久々にハテナマーク三本だ。

だが、杏は眉を潜める俺から逃げるかのように立ち上がり、

「ゴメンっ！　ちよつと用事あるから先に帰る。じゃあね」

と、俺の返事も待たずに弁当箱を引つ掴み、校門へ向かって走り出しやがった。

「……………訳分かんねえ。何だつてんだよ？」

勝手に帰るのはいいが、残されたこっちの身にもなつてくれ。寒空の下、一人で首を傾げてんのも虚しいもんだぞ。

「仕方ねえ。教室に戻るか」さすがに何も無い中で北風に当たり続けるのは体に悪い。面倒だが、暖房のきいた指導室に戻るか。

「数時間後」

「ぐあ……………頭痛え」

新鮮な外気を肺いっぱい吸い込む。机に向かい数時間と言うのは馴れてない人間にとっては拷問に近いものがある。しかも暖房を入れた密室だ。寒くなるから、と窓を開けなかったがお陰で空気は淀んで頭が痛い。自業自得とは言え、クリスマスにこれは酷すぎる気がする。

「……………こりゃあ早々に進路決めちまわないと酷いことになるな」
進路決定まではこの拷問に耐えなければならぬ。それはマズイ。
精神的にマズイ。

「……………杏もなんか急がしそうだったからな。先に帰るか」用事がある、ってことは少なくともこの近辺にはいないだろう。校内にい

ない以上、町に繰り出してみると言う訳で、わざわざ探すのも面倒だ。
……と言ったところでやることなんかありやしない。選択肢としては、家に帰る、春原をイジメに行く、があるのだが……虚しい。虚し過ぎる。

「……やっぱ杏誘ったときや良かったな」彼女持ちのくせにクリスマスに一人きりなんて我ながら何考えてんのかさっぱり分からん。
だがまあ、ここで北風に晒されてるのも寒いだけなんで、どっか行くでしょう。

〈商店街〉

……来てから気付いたんだが、どこに行こうと一人だと虚しいだけだ。普段は寂れてるくせに今日に限って赤やら青やらに照らされている。

「全く……聖人の誕生日なんか祝って何が楽しいんだか」無宗教大国、日本。一般人がイエスさんの誕生日を祝う道理なんか無え筈だが。

「……あれ？ 朋也君？」

不意に背後から聞き慣れた声が。振り返るとマフラーを揺らす棕が紙袋を抱えて立っていた。

「棕……どうしたんだ？ 買い物でもしてるのか？」手に持つ紙袋からは様々な物が顔を覗かせている。

「あ、いえ。お買い物はさつき終わりました。今は勝平さんを待つてて……」

「勝平さん？」

「あつ、い、いえっ！ 何でもないです……」

掠の言葉が力無く消える。久々に顔を真つ赤にしているのを見るが、まあそれはそれで元気な証拠か。

「とつ、ところで、朋也君はお姉ちゃんとは一緒じゃないんですかっ？」

「いや、杏は飯食つたら何か慌てて帰っちまった。……大体一時くらいか？」

春原をシメていた時間を入れてもそんなもんだらう。昼飯は二人で食つてた訳だからそこまで時間もかからない。

「一時……じゃあ入れ違いになっちゃったのかなあ？」

「？ 掠、一回学校に来たのか？」

「あ、はい。お姉ちゃん忘れ物してっちゃったから、学校まで届けに行つたんですけど……」

肩に下げたポーチに片手をつ込み、ゴソゴソと漁る。そして、そこから取り出したのは……

「……ペンダント？」以前、杏に買ったアメジスト紫水晶だった。

「お姉ちゃん、出掛けるときは必ずこれを着けていくんですけど、今日は何か忘れちゃったみたいで」

「……てことは、アイツ、ペンダント落としたと思って慌てて探しに帰つたのか」

それなら、ある程度は合点がいく。間違いから買ったペンダントだが、紛れも無く俺から杏への初めてのプレゼントだ。変に義理深い杏のことだから、俺に悪いと思って大慌てで家に戻つたんだらう。んでもって、胸元を弄つたのは、ペンダントが無いのを確認するためか。

んで、そのブツは掠の手にある訳で。家に無いのを見て、今も自分を通つた道を探してるんだらう。

「だとしたら……」

とつと探し出してペンダント返しちまわないとヤバイな。この寒空の下、足元見つめて徘徊するのは体に毒だらう。

「悪い、棕。ちょっと杏探してくるわ」あいつがいつも通りの通学路を通ってんだったら、学校から戻っていけばいつか会う筈だ。

「あ、朋也君、待ってくださいっ」

「ん？……………どうした？」

不意に呼び止められた。棕は何かを考えるようにして、数秒後、俺に右手を突き出してきた。

「あの……………お姉ちゃん探すんでしたら、このペンダントも持って行ってもらえませんか？」鎖に吊され、小さく揺れるアメジスト。優しく、紫色の光を煌めかせながら俺に手渡された。宝石の冷たさが肌を刺す。

「ああ、了解。色々とサンキュな、棕」

「いつ、いえ。大したことはしてませんから」両手を振って若干顔を赤くする棕。

しかし、うかうかしてられない。あいつん家まではバイク通学しなくなる程の距離がある訳で、徒歩で探してたらどれだけ時間を食うか分からん。とつと行かないとこつちも体冷やす事になる。

「急いだ方が良いな……………」

時計はDec 25、五時半を指している。となると、四時間半も探し回ってる計算になるが……………

「……………十二月、二十五日、か」

しかし、今からそんな気の利いたことをしてる時間はあるか？一刻も速く杏を見つけなくちゃなんのに……………

「…………………………」

だが……………偶然か必然か、クリスマスと言うことで神の導きか、調度良いものが調度良いところにあったりする。

「チツ　とつとと買つちまって杏探すか」

ドアに付けられた鈴の鳴る音を耳に、店の奥を目指して早足に歩を進めた。

（三十分後）

「ぜえぜえ……………」

何でこんな一生懸命に走ってるんだろうか？　こうも走る必要は無いだろうに。

「……………」　チツ　「どうも、寒空の中、とぼとぼと歩きながらペ
ンダントを探す杏の姿を想像すると、歩いてなんかいられなかった。
「どうも、今日の俺は変だな」

んまあ、んなことは朝っぱらから分かり切ってたんだが。妙に感傷的になってやがる。我の事ながらどうしたもんか？

「　　探すしかねえ、か」

探し出さない事には何も始まらない。とりあえず、杏の家まで逆走してくしかねえ！

「ぜえぜえぜえぜえ……………」

そろそろいい加減にしてくれ。そろそろ杏ん家に着いちゃうぞ。

俺は俺でここまで走り続ける事も無いだろう。何をやってるんだか。就活ですら真面目にやってないってのに……………　ああもう！　さつきから頭の中でグルグル回りやがって！

「上手い具合にすれ違ってたとしてもそろそろ遭遇する筈なんだが

」

いた。とぼとぼと辛気臭い顔ではあるが、あの中途半端に伸びた髪、左側を束ねた白いリボン。あの姿恰好は例え、双子の妹の棕であつてもすることはない。……………　妙にテンションが低いのが気

にはなるが。

「……………まあ仕方ねえか」何しろ、探しても探してもペンダントが見つからないのだからローテーションになるだろうよ。誰かに拾われちまったのかも知れないのに、探して探して、やっぱりまだ探して
それでも見つからない。

「はあ……………」とりあえず、何と言うか バカな奴だ。

「おい、杏!」

「えっ……………? とも、や ?」

調子が狂うほどの元気の無さ。こんな顔してんのは、あの時……
…雨に打たれて商店街の近くの空き地で佇んでた時以来か?

「何やってんだよ? こんな寒い中、とぼとぼ辛気臭い顔して歩いてよ」

「べっ、別にアンタには関係無いわよ……………」

とことん嘘の下手くそな奴だった。いつもなら怒鳴る返答を、そんな語尾が消えそうな風に言われても説得力の欠片もありやしない。春原でも連れてくれば元気になるんだろうか?

まあ、そんな事はどうでもいい。とりあえず、駆け寄って制服の上着を杏の肩に掛けた。

「んで? さつきから何探してんだよ?」と、まあ聞かなくてもいいようなことを聞いてしまつのは気まぐれか。

「……………ント」

「は? 何か言ったか?」

風も強く、人通りが無いとはいえ、ごによごによ呟かれても聞こえない。

「 ペンダントよ。あんたが買ってくれた……………」再び、語尾の消えかかった杏の言葉。やれやれ、推測は正しかった訳だ。こりゃ、棕にマジで感謝しないとな。

「落としちゃった、みたいなの……ずっと探して、家も探して、全然見つからなくて……」

今にも泣きそうな杏。と言うか、マジで泣き出す五秒前、な顔してるんだが。そんな顔されたら一番困るのは俺なんだが　その辺もちったあ察してほしいんだがな。

「ペンダントって、アレか。アメジストのやつ。……そんな躍起になって探すほどのもんなのか？」

「あんだねえ　アレはあたしがあんだに貰った最初のプレゼントなのよ。それを探すほどのもんなのか、って……」更に泣きそうな顔になる杏。ヤバイ、とつと何とかしないとマジで泣かれてしまう。

「はあ………掠と間違って買ったプレゼントなのに、か？」

「当たり前よ。そんなの関係ないわ。あたしにとっては本当に大切な物なんだから」

何と言うか、本当にバカな奴だ。間違いで買って、散々コイツを傷つけちゃった後に渡して、そんな物を大事にしてるなんて。

まあ、嬉しいと言えば嬉しいんだが、もっと他にも大事に出来るもんがあるだろうに。

「………なあ、そんなに大事なものののか？」

「当たり前だって言ってるでしょ！　あんだも少しは考えなさいよ！！　あたしがどれだけあんだが好きで、あんだから貰ったあのペンダントを大事にしてたか知らない訳っ！？」

少しは元気が出たようだ。まあ、怒った杏の顔なんか見慣れたもんで、どうせなら別の顔が見たい訳で。

「どうしてもアレじゃなきゃダメなのか？　なんなら新しいの買ってやるぞ？」

「ダメったらダメなの。あれ以外じゃダメなの………」

「………はあ。なら、仕方ないな」

そう呟いて、杏の首に腕を回す。首の裏っ側のところで金具を止め

て、その首をアメジストで飾り立ててやった。

「えっ……………？ 朋也、これ？」

「棕から預かって来た。お前が家に置き忘れて、棕がそれを届けようとしてたみたいなんだが、すれ違っちゃったみたいだな」

見直してみると滑稽な話だ。焦る気持ちが杏を追い詰めて、姉想いの棕とはすれ違っちゃまって、軽く言うなら自爆としか形容できないような状況だ。

「良かった。ホントに良かった……………」

弱々しく呟き、顔を伏せてしまう杏。その眼には夕日に煌く雫が浮かび上がってきていて……………

「お、おい、泣くなつて。泣かれて困るのは俺なんだぞ」

「でも、安心したら止まなくて……………」

どうも、女の泣つてのは間近で見るとインチキくさい。何がインチキくさいかって、そりゃあ男のプライドだのポリシーだの、その辺りのモノを粉々に砕いちゃうような破壊力が、だろうよ。

「んじゃ、喜ばせれば涙は止まんのか？」そうとだけ告げて、その右手を取った。ポケットに手をつ込み、箱を開けてソイツを取り出す。

「どうせなら新しいものでもねだれば良かったのによ。これはこれで別なもんなんだが」

そして、その薬指に嵌めてやった。ペンダントとお揃いの、アメジストの小ぶりの指輪を。

「えっ？ これって……………」

本日三回目の「えっ？」だが、その辺は気にしないでおいでやろう。杏は、指輪と俺の顔を交互に見ては眉を潜めてやがる。

「クリスマスプレゼントだ。まあ、さっきまでは俺も忘れてたんだがな」

「三十分とちよつと前」

「いらつしやいませ」。どんな物をさがしてるんですか？」

「あつ、すみません、アメジストの指輪って売ってますか？」

商店街。棕と別れ、すぐにも杏を探しに行こうとしたんだが、どうも両手が暇してた訳で、ペンダントを買ったあの店に入った訳なんだが……一人で入るのは二度目だったのに、どうも落ち着かない。

そして、目の前には舌つ足らずな感じの少女が。淡い銀色の髪の毛はどここの国の出なのか？

「わふ？ アメジストの指輪ですか？ えーっと、確か在庫あったと思いますけど……サイズはどうしましょうか？」

「はい。サイズ……えーっと」

思い出せ。杏と手を繋いだ時、どんな太さだった？ 俺より格段に細かったのは覚えてるんだが……

「俺の小指くらいの太さでいいですか？」

「はい、少々お待ち下さいね。ただいまお待ちいたしますので」
店員がパタパタと中に引っ込んでいく。その隙に財布の中身を確認する情けない俺。

ひの、ふの、み……よし、諭吉が一人に野口が七人いれば何とかなるだろ。ところで、なんで諭吉は下の名前で呼ぶのに野口は英世って呼ばれないんだろうな？ って、そんなことはどうでもいい。

「お待たせいたしましたー。ちょうど一つ残ってたんですよ。お客さんラッキーですねー」

「は、はあ、どうも」どうにもフレンドリーな店員だった。そして、今更ながらさっきの「わふ？」とは何ぞや？

「お会計、一品で 円ですよー」

「あ、はい、ちよつと待って下さい」どうやら、諭吉の出番は無か

ったようだ。さらば野口× 人！ ちなみに募金してる訳じゃないからその辺は気にしないで何の問題もない。旅に出る訳でも無し。「毎度あり」、です。それでは、クリスマス、頑張ってくださいね。ファイトっ、ですよ」

いやいやいや、何だこの店員は？ キャラを混ぜるのは勝手だが、訳が分からないから止めてくれ。

と、のんびりしてる暇は無い。とっとと杏を探しに行かねば。

と言う事で、色々とかオスな感じのする店員を残し、店を後にした俺だった。

く時間戻して現在く

「これ、わざわざ買ってくれたの？」

ザ・カオスワールドから戻ってくればそこにいるのは杏。目を潤わせながら指輪をしげしげと眺めている。

「ま、ついだったからな。それに、クリスマスだつてのに何も無いのは彼氏としてどうも情けないし」昼飯に色々ごちそうになったし。さすがに何も返さないのは俺の主義に反する。

「……………」と

「あ？ 何か言ったか？」って、同じやり取りじゃねえか、さつきと。

「……………」りがと

「スマン。もう少しデカイ声で言ってもらえると助かるんだが」

……………そして、それが最後の楔だったんだろ。杏の色んなものを溜め込んだ鍋の蓋を押さえてる。

「だから、ありがとって言うてんのよ！！ 何度も恥ずかしいこと
言わせんじやないわよ、この唐変木っ！！ 気のきいたことするか
と思ったら次の瞬間にはこうだしっ！！」

杏のローテンションは慢性的なもんじやないらしい。こうもどん
な興奮剤使ってもこう即効性を発揮しないだろうに。

「ふう……………まあ、元氣になったじゃねえか」

「当たり前でしょ！ あんたばっかにイイトコ取られたら堪えない
わよ」

……………理不尽かつ我が侘なのはいつものことか。どうやら、杏、
完全復活らしい。

「 ほら、行くわよ！」

「は？ どこに？」

いきなり腕をとられる。次の瞬間には強烈な引力がかかっていた。
「ここまでしてもらって、あたしが何も返さないとも思ってる訳
？ ほら、とりあえず商店街行くわよっ！！」

「お、おい、待てって！ こら、杏！ とりあえず引っ張んなっ！
！」

しまった。もう少しテンションが低いままにしておいた方がよか
ったかもしれない。

だがしかし、復活しちまったもんは仕方がない。付き合わないとい
色々怖い。明日の昼飯の豚カツの醤油が黒酢になってたり、卵焼き
が洋菓子顔負けなほどに甘くされたり……………少なくとも、相当怖い
事態になるのは確かだ。

「待てって！ こんな時くらい俺に手え引かせろ！ 情けないだろ
うが」

「ん？ そう？ あんたがあたしの手、引いてくれんならそれはそ
れでいいかな？」

どうにかこうにか、引っ張るのは諦めてくれたらしい。 と

いつか、何でこんなやり取りをしてるんだろうか、俺達は？

「……………ありがとね」

「んあ？」

「何でもないっ。ほら、行きましょ！ あてのない探し物で時間無駄に食っちゃったんだから！」

腕を絡めてくる杏。さっき、何か言った気がしたが　まあな
んでも良いか。

もう六時は回っちゃってるが、夜は長い。加えて、辛いなことに
冬休みだ。このお姫様が満足するまでは付き合いますか。

ども、久々のCLANNADですが、今回は少し危険かもしれない
せん。

何が危険か言う訳にもいきませんが、もし読んでる途中で危険だ
と感じたら読むのを止めるのを勧めします。

この短編を読んで、この夏休みの楽しみにが無くなった！ など
と文句をつけられても作者には賠償の方法がありませんので。

では、取り敢えず上だけですが、最後までお付き合いいただけ
たら幸いです。

草野球編「古河ベイカーズ再々結成」 - 上

〽 月×日 (日) 光坂高校・グラウンド〽

「 オイ、オッサン！」

「 ん？ あんだ小僧？」

「 これは何だ？」

「 何ってお前 ファーストミットだろ？ 見て分かんねえのか？」

「 んな事は見れば分かるっ！ 俺が聞きたいのは、これを俺に渡して何をしたのかと聞いているんだ！」

「 あんだ、んな事も分かんねえのか？ このメンツを集めてするこ」と言ったら一つしかねえだろうが」

人指し指をぐるりと周囲に向けるオッサンこと古河秋生。そして、その先にいるのは中二から社会人までのバラバラな顔ぶれ。

「 いや、何がしたいのかは分かるんだが……そうじゃなくて、何が目的で集めたのかって聞いているんだっ！！」

「 馬鹿かテメエはっ！ 九人プラス応援団って言ったら、野球やるに決まっただろうが！！」

…… ああ、空が高い。忌々しいまでにスポーツ日和だなこの野郎。

そしていきなりの急展開で悪い。文句なら後でオッサンが受け付けるから、今は黙って受け止めてくれ。

ぐるりと周りを見回す。そこにいるのは まあ、取り敢えず拳げていくとだな……

春原、杏、智代、美佐枝さん、芽衣ちゃん、芳野祐介、風子、藤林椋、古河親娘、オッサン、そして俺

そう、このメンツが揃ったら何をやるかなんて一発で分かる。一

発で分かるのだが、な。

「野球やんのは分かってんだっ！ だから、何で野球がやりたいのかを聞いてるんだっ！！」

朝一番で、

『オイ小僧。今日の正午、テメエの高校の校庭に集合。一秒でも遅れたら早苗のパン喰わせるから、覚悟しときな』

と、謎のモーニングコールが入った訳だ。無論、ふけることも考えたが相手はあのオッサンだ。逆らった場合、どんな報復が俺を待っているかなど考えるまでもなく分かる。いや、正確には分からんが、どのくらい恐ろしい事になるかどうかは分かる。

「そりゃあお前、そんなの決まってるじゃねえか」

そして、俺の怒鳴り声に引くことなく眼をキラんと光らせるオッサン。年甲斐もなくカツコイイから困る。

「無論、やりたいからだ」

「……………」

ダメだ、このオッサン。どこからツツコンで良いのか分かりやしない。ほら見る、杏だって啞然としていつもの神速ツツコミが無いだろうが。

「あのさ、色々言いたい事は朋也が全部怒鳴ってくれたから良いんだけどさ」

場の空気に耐えられなくなったのか、真っ先に口を開いたのは杏だった。

「相手とかどうなってる訳？ まだ来てないみたいだけど、ちゃんと呼んである訳？」

「当たり前じゃねえか。相手がいなくて野球が出来るかってんだ。ちなみに、前みたいによい子の為の野球教室じゃねえぞ」

んなことは分かってる。また、あん時みたいにガキの相手しろって言われたらそれこそぶちキレてやる。貴重な休みを一日消費できるほど俺は　まあ、暇か。だが、いきなり呼び出されて、のほ

ほんと野球を教えてやるほど俺は寛大でも上手くも無い。

「どうやって芽衣まで呼んだのか知らないけど……強いのか？ その相手チームの連中」

そして、金髪野郎が杏に続く。何をとち狂ったのか、コイツは地味に楽しそうな顔をしてやがる。

「ああ、強い。と言うか強いらしい。噂に過ぎないがな。まあ、前にやったオッサン相手よりは強いみたいだぞ」

「前のつて 甲子園ピッチャーがいたチームだよな？ 私達だつてしばらく野球やって無かったんだぞ？ いきなり出来るのか？」

これまたやる気っぽい智代。バスバスとグローブを叩きながらオッサンに尋ねている。

「ん」 ま、大丈夫だろ。ライトとキャッチャーはともなくとして、それ以外は中々のメンツだ。今回は俺が下がることも無えだろうしな」

「ライトつて……風子ですかっ！？ 風子とはかく扱いなんですかつ！ ショックですっ」

「僕もともかく扱い！？ 僕ほどの天才を捕まえておいてその言い草は何っ！？」

オッサンの言葉に騒ぎ立てる風子と春原。 つて、オッサン、

風子を呼ぶ時、一体どうやってたつてんだ？

「全く、仕事の休みを狙ったのかどうかは知らんが、朝にいきなり呼び出すのはどうかと思うぞ。俺だって人間だ。休みたい時には休みたいんだ」

「……でも、どうのこうの言つて来てるじゃない、アンタも。」

はあ、何であたしもこんな事に律義に付き合ってるのかねえ？」

深く、本当に深く溜め息をつく芳野祐介と美佐枝さん。しかしオッサン、本当にこの二人をよく誘えたな。

「私は、芳野さんさえいれば何でも良いですけど。それに、鉄壁のセカンドとまで言われて、断れる筈ないですしねー」

芳野祐介をキラキラした目で見つめるのは春原の妹とは到底思え

ない芽衣ちゃん。 と言うか、コイツを呼んだのはいつなんだ？ 流石に、朝一番で呼んで正午に間に合うほど、春原の実家は近くないぞ。それと、勧誘の仕方が大分違うような気がするのは俺だけか？

「あ、あのお父さん。流石にいきなり呼んでおいてその態度はヒドイと思うんですけど」

「お姉ちゃんと一緒に来いって言われたんですけど 何ですか、この状況？」

そしてオロオロしている古河と藤林。背後にいる古河母こと早苗さんは笑顔のままだ。と言うか、応援団ってこの三人のことか？

「ああ〜！ どういつもこいつも文句ばっか言いやがって！ 口を開いて言う事は文句しかねえのかこの野郎っ！」

いきなり怒鳴り出すオッサン。と言うか、文句を言われて当然の行動を取ってるんだから仕方ないだろうが。

「分かったよ。テメエらが納得しねえってんなら」

「納得しないって言うなら？」

何故かタメるオッサンに首を傾げる杏。そして、開口。そこから飛び出してきた言葉と言うと……

「今日！ 相手の連中に勝つことが出来たら、何でも好きな食いもん奢ってやるっ！！ 早苗のパンとか早苗のパンとか早苗のパンとかっ！！」

いらねえよっ！！ と、全員が心の中でツッコんだであろうその言葉。反響しないグラウンドで、取り敢えず全員が聞き取れるくらいには響き渡った。

「結局メシで釣る訳か。………まあ、どうせ暇だったから俺は何でも良いけどな」

ここまで来たらもう開き直った方がいい。大体、バカ正直にここまで来たのも、まあ少しはやってもらいたい、と言う気分であったからであって。

「岡崎っ！ お前はいいのか、そんなに簡単に流されて！！ 僕達
はともかく扱いされたんだぞっ！！ これを認めたら負けだぞっ！
！」

そしてうるさい金髪。まだそんな細かい事気にしてやがったのか
このアホは。そもそも、ともかく扱いされたのは“僕達”ではなく、
お前と風子だけだ。

「まあ そうね。ご飯奢ってくれるなら、やってあげてもいい
か」

「最近生徒会で身体を動かしてなかったらからな。運動するのも
悪くは無いな」

そして主力である女二人もスイッチが入る。この無敵のショート
とセンターがいれば何となりそうな気がするのは気のせいじゃない
んだろうな。

「確かにここまでできたらヤケだな。それに、ピッチャーが全開なら
外野まで飛んでくることも無いだろうしな」

「セカンドは少し大変そうですけど…… 芳野さんがいる限り、私も
頑張りますよっ」

俺と同じく半ばヤケになってる芳野祐介と、それにつられる芽衣
ちゃん。と言うか芽衣ちゃん、扱いやす過ぎるぞそれは。

「あたしはサードだっけ？ はあ、ベースカバーとかタッチアップ
とか面倒そうだけど まあ良いか。どうせ帰れそうにないし」

「風子には野球の神様がついてます！ ライトフライだけは任せて
くださいっ」

「ちよつとみんなっ！？ 何でそんなにあつさり受け入れてるの！
？ いいの？ 野球だよ、野球！ この前まではみんな嫌々面倒く
さそうにやってたのに、何この心境の変化はっ！？ 特に杏と智代
っ！ お前らまで認めたらツッコミ役がいなくなるじゃないか！！」

スタメンフルメンバー（マイナス）が了承していく中で、春原
だけが最後の砦になっていた。と言うか、最初はやる気だったくせ
に、何なんだお前は？

「大体！ 僕をとにかく扱いしておいて、その程度で誘えると思うなよっ！！」

「お前、そこまでしつこいと逆に白けるぞ。それに、帰りたいなら帰ればいいだろうが。誰も止めやしねえって」

こいつは一体何がしたいのか？ そんなに嫌なら帰りゃいいってのに。そこまでズルズル引つ張りやがって。

「えっ！？ あっ、いや え〜と……」

そして今度はビビったりオロオロしたりと挙動不審に。いつもからアホ丸出しの春原だが、今日はいつもに増してヒドイ。いや、ヤバイ。

「ヤバイって何だよ、ヤバイって！？ 僕だって野球やりたくない訳じゃないやい！！」

「人の心読むなよ。大体、やりたいならやりたいで良いじゃねえか。全く、素直じゃないな、陽平君は」

「陽平ってお前が言うなっ！ 気持ち悪くなるだろっ！！」

何かいつものペースになってきた。それを見守る生暖かい視線視線視線……

「岡崎さん、やっぱり春原さんと仲良しですっ」

「教室でもいつもあんな感じなんですよ。授業中でもやることがあるから困るんです」

クスクスと笑う古河と藤林。う〜ん、この二人って見るからに波長合いそうだな。どっちもほんわかしてるし。

「おっしやあ！ 全員が快諾したところで、そろそろ相手チームがお着きになるそうだぜっ！！」

いきなりオッサンが携帯片手に怒鳴った。誰も快諾などしていない、と言うツツコミを誰もが耐えたと言う事実は言うまでもないが。「それで？ 相手さんは前みたいなオッサン方？ 前より強いとかってたけどよ？」

前の甲子園ピッチャー以上となるとなかなかなものだ。あの変化球の山は相当に嫌らしい球だったし。

「いや、学生だ。お前達とそう変わらん年齢だって聞いているが」

「あたし達と変わらないって……まだ高校とか大学生だって言うの？」

俺や春原、杏や智代を見ながらオッサンが告げる。そして、真ッ先に反応したのは杏だった。

「高校か大学かと訊かれたら　少し困るな」

「　　？　何だよ？　そいつらの学校の名前、きいてねえのか？」

別にどこから来る学校だろうと関係ないのだが、流石に身元不明の学校相手に試合するのは気が引ける。

「いや、違う。何て言うか　アレだ、明確に書きちまうとソフ倫に引っかけちゃうからよ」

「……………は？」

「それにそろそろエクスタシー版が出るからな。そう言う学校云々の問題は非常に厳しいんだよ、今の世の中」

……………えーっと？　取り敢えず、誰が来るのかは大体分かったが、どこからツッコんでいくべきなんだ、この状況？

「……………何でそんな裏事情を表に引っ張り出してくるんだお前はっ！？」

と言う事で、この奇妙な空気からツッコミを入れていくことにした。

「何でって、仕方ないだろうが。時事ネタチックにこの展開になってるんだしよ」

「時事ネタって　何なの、今回？　いつからこういう雰囲気なヤツになった訳？」

オッサンの言葉に杏までツッコミを入れ始めた。いやさ、流石にこの展開だけは誰も予想できて無かったようだし。

「期間限定の時事ネタなんだからいいじゃねえかつ！ 文句ならこんな状況を考え出した奴に言いやがれっ！！」

そして逆切れするオッサン。いや、だったらそう言う不用意な発言をしなけりゃいいじゃねえか。

「つまりさ、それだと来る学生って言うのは……………やっぱアレ？」

「だろうな。實力まではよく知らないが、確かにアレだな」

美佐枝さんと芳野祐介が難しい顔して唸っている。この二人を同時にここまで唸らせるって、相手のチームの連中が恐ろしい。

「面識は無いですし、名前を知ってるくらいなんですけど」

「僕達レベルにアレな連中だからねえ。これはちよっと、コテンパンに叩きのめした方が良くんじゃない？」

春原兄妹もそれぞれの反応。そして春原兄の方は色々と訳の分からんコメントをしてやがる。

「同じような幻想の存在として、風子は負ける訳にはいきません」

「幻想の……………存在？」

突然の風子の謎の言葉に首を傾げる智代。そして、訳が分からんのはみんな同じらしい。きょとんと首を傾げている。無論、俺もだが。

「風子は幻影、彼らは虚構世界の住人。どっちも幽霊みたいなものですっ」

「こらそこっ！ 危険な発言をするなっ！ そのシナリオ云々にひっかかるネタばれ兼粋越え発言は禁止だっ！！」

それを語るのは俺達の仕事じゃないし。相手方が来たらその辺は任せちまえば良いんだよ。

そしてその時、校門の辺りに何やら奇妙な集団が現れた。あれは

黒の制服か？

「はあはあ……………ふええ、暑いよお」

「こんな坂道の上に学校を建てるなんて 開校した人は何を考
えていたんでしょうか？」

顔やら何やらは見えないが、声だけは少しだけ聞こえてきた。

って、この声、明らかに女の声だろ？

「きよ、恭介……………こんなに遠いなんて聞いてないよ」

「こんなに遠いから朝一で寮を出たんだよ。この程度でへばってる
ようじゃ、内のチームのスラッガーは任せられないぞ、理樹」

「だから、僕より恭介や謙吾の方が飛ぶんだから」

そして今度は野郎の声。……………と言っても、二つの声の内、一つ
は女みたいな声をしてる訳だが。

「真人くん そんなにバッドとか重そうな道具持ってて重くな
いの？」

「重そうに見えるなら少しは手伝おうとは思わないのか、三枝っ！
流石の俺でも この量はキツイぞ」

「はっはっはっ、真人少年にとってはいいトレーニングになるだろ
う？ 目的の高校までは着いたのだ。もう一息だぞ」

今度はその向こうからデカイ男と女が二人。男は……………何か、野
球に使う道具を山のように積まれてるんだが、アレは大丈夫なのか？

「真人っ！ その程度で音を上げるなんてだらしないぞ！ それで
も俺達の筋肉担当かつ！？」

「……………宮沢さん、そう言うのでしたら、井ノ原さんを手伝ってあ
げてはいかがでしょうか？」

「美魚、そのバカにそんな事を言っても無駄だぞ」
何かもう、色んな意味で愉快的会話が繰り広げられている。

何か、俺達以上にアレな感じのチームだな、オイ。

「おっ、来たか来たか！ この古河ベイカーズと対等以上に戦える
ほどの野球チームが！」

「やっぱ……相手はアレなのか」

一気に気が抜ける。実際にあのチームを見たのは初めてだが、何て言うか、もうスタッフが変わって空気も変わったって言うか

……いや、そうじゃなくてだな。

「女の子ばっかねえ……ま、うちだって似たようなもんだけどさ」

「でも、何か私達より年下みたいだよ、お姉ちゃん」

藤林姉妹も観察中。と言うか、観察しているのは全員なんだが。

「へんっ！ 僕より年下のくせに勝負を挑もうだなんて 無謀な奴らだね。返り討ちにしてやるよっ」

「うーん、あの男の人たち、みんなお兄ちゃんよりも年上に見えるなあ あと、年齢にツッコミ入ると危険だから控えてね、お兄ちゃん」

そして春原兄妹。と言うか芽衣ちゃん、そのセリフの方がよっぽど危険な気がするのほきつと俺だけじゃない筈だぞ。

「風子としては、年齢なんかはどうでもいいんですが、風子だって年上だってこと、教えてあげますっ」

そして伊吹妹。何か兄弟姉妹率が高いな。公子さんもいたら三組だぜ。それと風子、お前、全っ然年上に見えないからな。

「えーっと？ 貴方が連絡をくれた古河さん？」

「おう、古河秋生。古河は三人いるから秋生さんで良いぜ」

「秋生さん、と。俺は恭介、棗恭介。こっちも棗は二人いるから恭介さんで良いぜ」

茶髪の、明らかにリーダー格の男が前に出てくる。 うーん、

コイツだけ年上っぽい感じがするが。

「んじゃ恭介、そのチームが、俺達古河ベイカーズと試合をやってくれるチームってことで、良いんだな？」

「ああ。チーム“リトルバスターズ”、マネージャー込みで十人、間違いないな」

くはあ、ついに出てしまったこの名前。もうどっからツッ

コんでいいのか分からんし。

「それじゃ、アンタがキャプテンだったら、マネージャーっていつなんだ？」

そろそろ俺達も会話に混ぜてもらわないと、状況についていけなくなるぞ、オッサン。

「ん？ 俺は別にキャプテンじゃないぞ」

「はっ？ いや、どう見たってお前がリーダーだろ？」

恭介とかいう男はいいやと首を振っている。どこか面白そうな顔のくせ、結構本気で否定してやがる。じゃ、誰がキャプテンなんだよ？

「…………… 僕がリトルバスターズのリーダー と言うかキャプテンだよ。理樹、直枝理樹」

「お前が？ …………… まあ、誰がキャプテンでもいいか。それなりに理由があんだろうし、見た目で判断するのも危険か」

外見と中身が一致しないのは、既に杏と智代で経験済みだ。直枝って奴も、実は隠された力があるとか無いとか

「恭介 疲れた。小毬ちゃんもクドももう倒れ掛かってるぞ」

「鈴、取り敢えず人様の前だ。せめてもう少し妹らしく振舞うか、最悪女の子としての気品は崩さないで欲しいんだが」

「却下。それより、小毬ちゃんとクドに何か飲み物をあげてやってくれ」

妹？ ああ、棗がもう一人いるってのはそういう事か。しかしまあ、確かに女らしくは無い。外見はともかく。その辺り、杏に似て……………

「朋也？ あんた今、何か失礼な事考えてない？」

「いや、気のせいだろ？ 多分、きつと、恐らく気のせいだ」

何か、色んな意味で恐ろしい言いがかりをつけてくる杏。まあ、取り敢えずその辺が第一に注目すべきところなんだが。…………… まあ、女らしくない、と言うよりは鈴とか言う奴のはぶっきらぼうなだけのような気がするが。取り敢えず、杏よりはマシっばいが……………

「……………朋也、もう一回聞くけど、失礼な事考えてないわよね？」
「いやだから、気のせいだろうよ。取り敢えず、俺は気のせいだと思うぞ、うん」

それに、笑顔で拳を握り締めるのは怖いから止めてくれ。野球やる状態だと、飛んでくるのは辞書じゃなくてボールになる訳で。当たりどころが悪かったらマジで死ぬぞ？ 冗談抜きで。まあ、岩に突き刺さるレベルの広辞苑も当たりどころによっちゃ死ぬだろうが。

Another View - Little Busters.
直枝理樹

「なあ、謙吾っち。あれが俺達の試合相手なのか？」

「どうやらそのようだな。あのオッサンがキャプテンのようだ」

年齢層がバラけているな、このチームは」

僕の後ろで、真人と謙吾が何やら話している。と言うか、その膨大な荷物を抱えたままで重く無いのだろうか？

「このチームの年齢が偏りすぎなだけでしょう。恭介さん以外は全員二年生ですから」

「うむ、留年生もいないことだしな。おねーさんとしては鈴君やクドリヤフカ君やコマリマックスは年下にしか見えないが……」

そして西園さんと来ヶ谷さんのツツコミ。と言うか、来ヶ谷さんは僕から見ても年上にしか見えない。

「自称お姉さんなだけあるなあ」

「ん？ 何か言ったか、理樹？」

僕の呟きに恭介が反応する。そして、目の前に並ぶ古河……秋生さんと、朋也とか呼ばれてた人も首を傾げていた。

「いや、何でもないよ。」

それより、この後どうするの？ 試合するのはいいにしてもさ」
取り敢えず、本気でやるなら僕達も制服から着替えたいし、向このチーム 古河ベイカーズだっけ？ その人たちも準備は終わってないみたいだし。

………ところで、今更だけどなんでベイカーズ？ パン屋でもやってる訳？

「そだな………俺達のスタメンはこの前と同じで良いだろうから、後は器具か。そっちはどうするんだ？ チーム編成、終わってるのか？」

「チーム編成は理樹がやってるから問題無いが ただ、装備は変えたいよな。俺達も、今回ばかりは本気で掛からないと無理そうだ」

恭介も僕と同じ意見だったのか、秋生さんの言葉にそう答えた。僕も小さく頷いて肯定の意を示す。

「ちょっと待った」

だけど、その瞬間に朋也が声を上げた。その場にいた全員が彼のことを振り返る。

「試合するのはいいが、その前に………審判はどうするつもりだ？」

＼ Another View End ＼

「試合するのはいいが、その前に………審判はどうするつもりだ？」
この前はオッサンが手配したのか、そこそこな審判が揃っていたが、今回は誰も来てない。 どうするんだ、マジで？

「ん？ ……ああ、ちゃんと手配はしてあるぞ。まだ 来てないみたいだけどな」

周囲をオッサンが軽く見回すが、どこにもそれらしき人はいない。

と言うか、審判ってどこで手配するんだろうか？

「遠いから少し時間がかかるとか言ってたが……そろそろ着くだろ。それまでの間に、俺達は準備を済ませておきゃいいんだ」

「ん、まあそうだな。それじゃ俺達はどこで着替えれば良い？」

オッサンの言葉に恭介が訊き返す。 そっか、こいつらはこ

この生徒じゃないから、自由に動く訳にもいかないか。

まあ、俺達だって半分近く校外の奴らだけだな。

「そうだな オイ小僧、どっか使える教室とか無えのか？」

「いきなりんなこと訊かれたって……一応校舎は開いてるだろうし、休みだから教室も使ってないだろ。開いてる教室ならいいんじゃないか？」

つか、俺なんかは平日でも特別教室棟で昼寝してるし。春原なんかは、恐らくもつと目立つとこで寝てるだろうし。

「校外の人間を勝手に校舎に入れるのは少し問題があるが ま、何とかなるだろう。私もいることだしな」

そして、生徒会長様のお墨付き。うーん、その対応は全校生徒の代表としてどうよ？

「分かったよ。準備が終わったら僕たちも出てくるから。それまで待っててよ」

「おら真人、謙吾、荷物持て。教室に移動だとさ」

智代の言葉に理樹が頷き、そして恭介が他の連中に支持を出していた。その恭介の言葉にぞろぞろと動き出す女ども。

「朋也ー！ ほら、いつまでもぼさつと突っ立ってないでよっ」

「おら岡崎。もたくさしてると置いてくよ」

そこで、杏と春原の声 って！ お前らなんで勝手に移動してんだよっ！？ …… つか、オッサンまでいないしっ！！

「チッ……おい！ 待てよお前らっ！！」

まあいいか。試合前にカッ力することも無いだろう。

「十数分後」

着替え、器具の準備、その他諸々を終えて再びグラウンドに降りた訳だが、相手チームの奴らはまだ来てなかった。

もつとも、代わりになにやら見た事あるようなないような奴が数人を引き連れて立っていたんだが。

「おおっ！ 往人！ 来てくれたかつ」

「はあ いきなりこんな僻地に呼び出すんじゃないよ、秋生。俺だって暇じゃないんだ」

「……………」

えーっと だな？ どちらツツコンだら良いのかパート2。つか、俺とキャラ被りまくってね、アイツ？

「ねえ岡崎、あの審判の人誰？ なんか、古河さんと仲いいみたいだけどさ」

俺がソイツを茫然と眺めると、美佐枝さんがそう尋ねてきた。

……………いや、色々聞きたいのはこっちのほうなんだが。

「と言うか、あのオツサンは奴と知り合いだったのか？」

「お父さんの交友関係は広いですから。お友達なら日本中にいると思いますよ」

ソイツを見ながら胡散臭そうにする春原と、にこにこしながら答える古河。……………古河、流石に作品を超えた交友関係ってのはどうかと思うぞ？

「おら！ 俺の昔の友達の国崎往人だっ！」

「……………国崎往人。まあ、一応そういうことだ」

あゝ？ もういい加減ツツコンだ方がいいのか？ それともここは取ってスルーを通すべきなのか？

「あの この人、ちゃんと審判出来るんでしょうか？ それに……………何故か鳩尾に蹴りを入れたくなるんですけど」

だが、俺が敢えてツツコミを封印しようとしている中で、芽衣ちゃんがあつさりツツコンでしまうという残念な状況。

……それと、その発言はいろんな意味で危険だから止めた方がいいぞ。空に帰る羽目になるから。

「あんだあ？　俺は千年の夏を越えてきた男だぞ。その上、カラスにまでなつたこともある。そんな俺に、審判ごときが出来ないとでも思っかつ！？」

「いやいやいや、その経歴の持ち主が審判できる方がおかしいから」
そして、国崎の言葉に俺達の誰かがツツコミを入れるよりも早く、俺達の背後から聞き慣れない声が。

「ダメだよ理樹君、そこはツツコンじゃ。あの人にだって、色々と事情があるんだよ。多分」

「そうだな。小毬の言う通りだぞ理樹。お前のツツコミは最近鋭さを失ってて、俺は悲しいぞ」

そして、謙吾とかいう男と、そいつが小毬とか呼んでる女の、これまた微妙な二重ツツコミ。

「しかし　この調子だともう少し他の奴も出てきそうな気配だな」

こう勢ぞろい気味のこの状況だと、さらに年代を遡って何か出て来てもおかしくない状況だが……

「ん？　うぐうと愉快的仲間達なら来ないぞ、朋也」

「は？　何でだよ？　……それに、うぐうと愉快的仲間達って……それに、なんで俺の名前知ってたんだよ？」

大体、今のセリフだけで俺の考えてることが分かるんだよ、お前はっ！？

「いや、まあこれ以上キャラのインフレを起こすのもなんだしそれに、もつと重大な理由がある」

『重大な……理由？』

軽く肩を竦める国崎。それと、その深刻な感じでわざわざ揃って

聞き返さなくていいからな、杏とか智代とか藤林とか。

「ああ。奴らを読んだら　　ＣＶが一気に被るからな」

「……………いやいやいやっ！　そういう発言禁止だってんだろっ！
大体、もう既に被りまくってるからっ！！」

さっきだって芽衣ちゃんも前世の記憶が蘇りかけてただろうが！
それに、ハードにこだわらなければ今だけでも三重に被ってるぞ
っ！

「岡崎　　ツツコミ役として頑張るのもいいが、一応人様の前だ
ぞ」

「そうだな。理樹を見習った方がいいな、お前は。芳野祐介の言う
通りだぞ」

「全くだ。流石は祐介と恭介。言う事が違うな」

「だあぁっ！　　 temeエらはそう一気に喋ると声が被るんだよっ！

音声付だと聞いている奴が混乱するだろうがっ！！

「まあ、もしフルメンバー揃えようとしたら、声が物凄い事になる
よね、多分」

「へっ！　俺だって千年前には剣の達人だったんだぜ。今じゃ筋肉
一直線だがな」

そして、理樹と真人がやっぱり危険な会話を。そう言や、お前も
被ってたな、筋肉野郎。

「もう何でもいいでしょ？　バスターズの人も来たってことは、準
備はもうどっちも出来たってことだろうし」

混乱し始めた場の空気を一気に斬り裂く杏の声。その言葉に、オ
ッサンと恭介と国崎が一気に覚醒しやがった。

「そうだな。準備万端、元氣百倍。んじゃ、いっちょやるとすつか
！」

「ほら理樹っ！　お呼びだぞ、キャプテン。整列させる整列っ」

混沌と化していた空気が、一気に試合のものへと切り替わる。こ
の辺り、オッサンとか恭介とかの力を示してるんだが　　やっぱ、

常人な気がしねえ。

「それじゃ整列。ファースト側に古河ベイカーズ、サード側にリトルバスターズだ」

そして、かなりやる気を感じられない国崎の言葉。こいつ、本当に審判やる気あんのか？

「……………ま、細かい事は気にしても仕方ないか」

オッサンの言葉が嘘じゃなければ、あの女だらけのチームも相当強い訳だ。気を抜いてる訳にもいかないだろ。

「洋平っ！ ボール、後ろに流したら殺すわよ？」

「それさつきあの人にも言われたからっ！ 何でお前にまで言われなきゃいけないんだよ、杏っ！！」

パスパスとボールでグローブを鳴らしながら、杏が笑顔でそう告げる。ある意味死刑宣告だが……………頑張るんだな、春原。

「でもお兄ちゃんだからねえ せめて、今日は一本くらいヒット打ってほしいよ」

「ダメよ芽衣ちゃん。いくら本当の事だからって、実の兄にそんなこと言ったら」

「いや相良。お前の方が酷い事言ってると思うんだが」

サブキヤラ衆三人がそれぞれにツッコミ三連弾。つか、芳野祐介と国崎もセリフがほとんど変わらんし。

「それじゃ、風子いきますっ！ ライトは絶対に抜かせません」

「いや、一回表は私達の攻撃だぞ。抜かせない前に、相手を抜くことを考えた方がいいぞ」

若干タイミングのズレた風子に苦笑しながらツッコむ智代。

智代のツッコミってのも珍しいもんだ。

「お父さん、岡崎さん、頑張ってくださいっ！！」

「秋生さんっ、頑張ってくださいね！ ……………それと、他のみなさんもっ」

「お姉ちゃん、応援してるからね」

応援団衆も準備は出来たらしい　　つか、俺、今日初めて早苗さんの声を聞いたような気がするんだが。……まあいいか。

「おら、行くぞ、お前らっ！　古河ベイカーズの底力、見せてやるぞっ」

『おおお～～！！』

オッサンの言葉に強く叫ぶ。リトルバスターズだか何だか知らんが　いや、まあ知ってるが　取り敢えず、何だろうと負けるもんか。

わざわざ出てきた休みの午後、むざむざ無駄にしてたまるかつ。

と言う事で、リトバスとAIRです。と言っても、ネタばれチツクなのはリトバスの方だけです。

そして、今回はあまりCLANNADっぽくない文章になってしまっています。内容も今までとは打って変わってギャグじみえますし。朝倉由那節はなるべく抑えたつもりですが、全然鍵っぽくない文章なのは今回はご勘弁のほどを。

ちなみに、往人さんも祐介さんも恭介さんも、ハードによつては声が被るため、脳内再生する際にはご注意ください（え

では、取り敢えず上だけですが、早めに下を書きあげるので、次回も読んで頂ければ幸いです。

下では完全野球全開なんで つまり半バトル展開なんで、朝倉由那文章が一気に活性化する恐れがありますw その辺が出てきた際はスルーをお願いします。

ではでは、次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0745d/>

CLANNAD Short Storyies -想ひ行き交う坂道で-

2010年10月10日01時46分発行